

学年レクの内容を保護者に提案するための話し合いを通して、 合意形成の在り方について考え、リーダーとフォロワーの育成を図る学習

～6年「学級ポストから（学級や学校における生活づくりへの参画）」の実践を通して～

小野 義幸

I はじめに

全体研究の3年次テーマ「子供が学びをつなぐ学習づくり」を受け、特別活動では、特別活動全体を通して自治的な活動に連続性をもたせ、各学習過程の評価を重視することで実現を目指した。そこで3年次は、「自治的能力を発揮する児童の育成」を研究テーマに設定した。学級活動では、事前の活動、学級会、実践、振り返りなどの一連の学習過程の中で合意形成したり自己評価したりする活動を繰り返し積み重ね、それと同時にリーダーとフォロワーの育成を図ることで、各活動や学校行事などでも生きてくる資質・能力の向上を目指した。



積極的に意見を述べる児童の姿

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、学級活動を基盤として育んできた自治的能力を特別活動の各活動と学校行事において使えるものとするところである。そのために、以下の2つの視点から、授業実践「学級ポストから（学級や学校における生活づくりへの参画）」における児童の様子について分析する。

- ① 学級集団の発達段階を踏まえたリーダーシップの育成
- ② 次の活動に生かす自己評価の工夫

なお、研究の対象とした活動の概要は以下のとおりである。

1 活動名 「学級ポストから（学級や学校における生活づくりへの参画）」

2 活動の目標

レクの内容を提案するための取組内容や方法について多角的に考え、積極的に意見を出したり、合意形成を図ったりし、集団活動に自発的に参画しようとしている。

3 活動の概要

本活動は、(1)学級や学校における生活づくりへの参画の「ウ 学校における多様な集団の生活の向上」に関わるものである。

学級会について好意的に受け止める児童が増えた半面、普段から学級内のことでリーダーシップをとってリードすることに対しては、抵抗感を感じている児童がまだまだ少なくない実態から、意図的・計画的に議長団（リーダー）とフォロワーの育成を図ることとした。

学級会では、レクの目的を明確にし、「学級・学年・保護者等の思い」と「事前に決まっていること」を踏まえながら、自分がやりたいことを通す自分本位の提案ではなく、多角的な視点で全体のことを考えながら話し合いを進められるようにした。また、1つの案への単純な賛成や反対意見の積み重ねで終わるのではなく、比較や合体などを軸とした話し合いをすることで、より多くの意見を生かした合意形成ができるように議長団（リーダー）とフォロワーに働きかけるようにした。

Ⅲ 結果と考察

1 学級集団の発達段階を踏まえたリーダーシップの育成

(1) 結果

本活動までに、約2割の消極的で控えめな児童が少しずつ前面に出てくるようになってきたが、議長団に加わることを妨げていた一因でもある「話し合いの仕方に自信がもてないこと」を、さらに改善していく必要があった。そこで本活動では、事前の計画委員会の打ち合わせの段階でそれぞれ個の思いを出し合い、話し合いの形態や論点をどのようにするとスムーズにいくかを話し合った。その結果、柱1「参加者の思い」では、まず個人で考え、その考えをすぐに全体で交流することとした。



資料2 黒板上で整理しながら話し合いを進める議長団

柱2「レクの内容」では、個人で考えた後に班で意見を2つに絞り、それを全体で交流することとした。このような形態にした理由について、事前に議長団が用意した説明は以下の2点である。

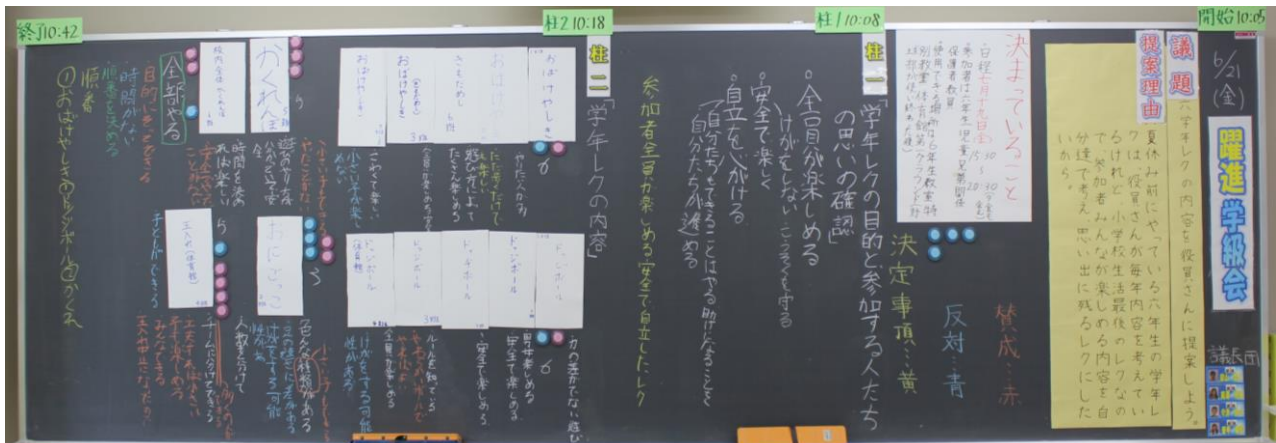
①柱1は、各個人がしっかりと意識して取り組むべきことなので、個人で交流する。

②柱2は、合意形成が必要なことなので、それを班と全体で2度行うことでより深める。

授業の終末には、担任からフォロワーに対し、本時の議長団の姿から学べることを確認し、新たな合意形成の仕方や会の進め方を共有した。また、議長団に対しては、時間内に終えたことと、内容の伴った合意形成ができていたことを評価した。

(2) 考察

計画委員会の際、事前に話し合いの仕方を確認するだけではなく、なぜそのような話し合いの仕方にするのかを明確にした。議長は、フォロワーにその意図（上記①②）を説明しながら進めるので、お互いが納得の上で意思疎通ができ、そのことが議長団に自信をもたせることにつながったと考える。本学級会の目的は、保護者に提案する学年レクの内容を決めることであったが、学級会では常にリーダー（議長団）とフォロワーの育成も意図して取り組んできた。副議長による合意形成の仕方は、今までにないやり方（反対意見をフォロワーと相談しながら消去していくもの）であったが、一つ新しい方法を共有することができたことも今回の収穫である。また、フォロワーからの多くの建設的な意見が全体の進行に大きく寄与していることを再確認できた。このように、学級会の終末では、親和的・受容的な雰囲気の中で、内容面は議長団が振り返り、運営面は教師が中心となって振り返ることで、議長団の承認欲求を満たすことにもつながると考える。



資料1 躍進学級会～書記による板書～

2 次の活動に生かす自己評価の工夫

(1) 結果

本活動では、事前の取組後・本時・事後の取組後に3回の自己評価を行った。事前の取組後に行った評価は、「これから話し合う議題について自分の考えをもてたか」である。ほとんどの児童が、事前に相談ボードを利用して自分の意見を付箋に書いて貼っていたため、自分の行動について肯定的に評価していた。

柱2は私の担当だった。本番まで話のまとめを
くわしく考えていなかった。合意形成はたいてい人のよい意見を
とり入れることだと思っていたので反対意見という名の
問題点が出て賛成意見という名の改善案が出てい
ることに気づき改善案で改善できない問題点があ
るもの以外はずべて採用した。このやり方がよいかわ
るりは私にはよくわからないがこの方法をとっ
て思いつき、まとめ方はたいていあるということ、話のなが
れをよむということが大切だと思いついた。

・議長団の進め方にはとても、参考になるものがあり
ました。例えば、意見入りの一部の人の反対があったときに、
このような工夫をすれば、あたがいがなるとできる
ということをしていました。また、反対をなくして、すべての
意見を可決していたのと、新しいやり方でした。
・フロアとして、みんなりためになる意見を
考えられるようにがんばりました。

資料3 抽出児童①の振り返り

資料2は、本時の学級会を終えた後に書かれた副議長担当児童の振り返りである。柱2の進行を担当した感想として、反対意見の中の問題点を解決し、実現可能な案を全て採用した自分の

資料2 副議長担当児童の振り返り

やり方はどうだったのだろうか疑問を記述して

いる。資料3は、本時の学級会を終えた後に書いたフォロワー側の児童の振り返りである。この児童は、柱2での議長団の進行の仕方について、とても参考になると記述している。また、反対意見の中で述べられた「反対の理由」を解決していくことで、元々の意見を生かしていくやり方について、「新しいやり方」と表現している。

レクの準備では、各係が自分達の休み時間を
けずって少しでも参加者が楽しめるように工夫
をしていてよかったと思います。当日、ぼくは司会者
がスムーズに進行できるようになるべく素速く行動
したり静かにすることを心がけました。

資料4 レク進行係の抽出児童②の振り返り

ぼくは学級会がとても、自分や学級のためになっ
てると思います。なぜなら、自分たちで、学級の
問題や、したほうがいいことを話し合うとそれについて、
自分たちで決めたことだからしっかりやるという
気持ちになれました。

資料5 抽出児童③の学級会に対する思い

資料4は、学年レクにおいてレク進行係を担当していた児童の振り返りである。当日までのがんばりと、進行において気を付けたことなどを記述している。資料5の児童は、事後の取組の後に学級会をする意味について肯定的に捉えて記述している。

(2) 考察

議長団が本時に向けて最も時間を割いて打ち合わせをしていたのは、話合いの形態についてであった。柱1は、合意形成と言うよりも個人の思いを大事にしたい思いがあった。したがって、班内での交流はせずに、全体の中で自分の思いを発表してもらい形態を選択したと考えられる。柱2では、まずは班交流の形態を取り、各班に2つの案に絞ってもらった。数を小数に限定することで、必然的に班内で合意形成する必要が生まれるからである。各班は2つの案を黒板に貼って説明をするが、その後の全体交流では、班の考えではなく個人の考えで交流した。その意図は、班内で通らなかった意見に再び光を当てる機会を設けることと、班と全体の2段階の合意形成をすることで、より深まりのある話合いになると考えたからである。全体交流において、副議長が一つ一つ反対意見の内容を確認して解決していく合意形成の手法をとった。これに対して

は、抽出児童①のように肯定的に捉える児童が多くいた。これまでにさまざまな合意形成の手法に出合ってきたが、また一つ新しいやり方を知れた喜びがあったと考えられる。事後の取組として、休み時間を中心にレクの役割分担や準備を協力して進めてきた。抽出児童③のように、決まりを守ろうとする意志が芽生えたり、休み時間を削ってでも参加者のために頑張ろうとする気持ちが沸き起こったりする児童が多いのは、学級ポストや相談ボードの利用から始める学級会の存在が大きいのと考える。自分たちの学校生活を豊かにする一つのツールとして、今後も大いに学級会が機能していくように取組を継続していく必要がある。

IV まとめ

本研究では、レクの内容を提案するための取組内容や方法について多角的に考え、積極的に意見を出したり、合意形成を図ったりし、集団活動に自発的に参画しようとする態度の育成を目指してきた。その成果と課題を以下に示す。

1 成果

- 常に親和的・受容的な雰囲気の中で学級会に取り組み、育ってきたフォロワーシップを基盤としてリーダーシップの育成を図ったことで、議長団の運営を自分たちの力だけで行うことができるようになった。
- 事前の取組・本時・事後の取組と3回行う自己評価を、多面的に取り組むことによって、次時への意欲付けができた。次の活動に生かせそうなことに気付いたりすることができた。

2 課題

- 特別活動の各活動と生徒指導及び学級経営とのつながりを意識し、意図的・計画的に年間指導計画に位置付けていく必要がある。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領 文部科学省 平成29年3月
- 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 平成29年6月
- 小学校学習指導要領解説 特別活動編 文部科学省 平成29年6月
- 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 特別活動】
国立教育政策研究センター 教育出版 平成23年11月
- 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編
文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター 平成29年9月
- 初等教育資料 No. 963 「特集Ⅱ 学習指導要領に向けた指導の在り方〔特別活動〕」
東洋館出版社 平成30年1月
- 道徳と特別活動 vol. 34 No. 2 文溪堂 平成29年4月
- 道徳と特別活動 vol. 34 No. 4 文溪堂 平成29年6月
- 自分を鍛え、集団を創る！ 特別活動の教育技術 杉田 洋 小学館 平成25年3月
- 小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別活動
杉田 洋 東洋館出版社 平成29年12月
- 小学校教育課程実践講座 有村 久春編著 ぎょうせい 平成29年12月
- 特別活動の理論と実践 中園大三郎 松田 修編著 学術研究出版 平成30年3月
- やさしく学ぶ特別活動 赤坂 雅裕 佐藤光友編著 ミネルヴァ書房 平成30年3月
- 特別活動 田沼 茂紀 北樹出版 平成30年4月
- 特別活動の理論と実際 河村 茂雄 図書文化 平成30年10月

特別活動部会

司会者 薬師寺要次（旭川市立東光小学校教諭）
助言者 林崎 俊一（北海道教育大学旭川校教授）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

学級会の話合いの内容について

○議長・副議長の話合いの進め方がすばらしかった。現在の学級の実態として議長団のレベルはどのような状況なのか。

→今年度は委員会ごとに議長団を順番で回して構成している。今回の議長団は多少強引に引っ張る一面も見られるが決断力に優れた子たちである。

○学級レクの内容を決める話合いであったが、全ての内容が柱1にあるように安全であったような気がした。決め手となった基準は何か。また、「提案理由は元々このような理由であるから」といった戻りも必要であったのではないだろうか。

→提案理由を踏まえて決めた「柱1」の考え方を判断基準とした児童が多かったように思う。今回の学級会は、提案理由の中の気持ちの部分具体化したものが「柱1」だと押えている。したがって、柱1で決まったことを念頭に柱2を考えるのは妥当であると考えている。また、全ての内容が安全と言えそうとも考えられる。しかし、例えばドッジボールなどは、子供たちなりに検討し、小さな子供たちへの配慮から第1位希望にはならなかったと推測する。

○子供たちには、自己実現の視点はあったが、社会参画の視点は不十分であったように感じる。「自治」「自発」について助言者から指導をいただきたい。

○柱2については、グループから2つずつ案が出されていたが、全体交流では、グループの意見というよりも個人の意見を言っていたように感じる。どのようなやり方であったのか。

→基本的にグループ内では合意形成をしているため、グループの案として挙がってくるのは一つか二つである。ただ、全体交流の際にグループで決まった案を一通り交流した後には、グループとしての意見ではなく、あらためて個人の意見で交流するようにしている。それは、グループの中で通らなかった意見を再度出す機会を設け、多様な考え方に触れられるようにしているためである。

○学年レクで使える時間が長いので、出てきた案を全てできると考える児童が出てきたのではないか。時間的な制約やそれぞれのゲームやスポーツに何分必要なのかといった情報を与えたり考えたりすることも必要であったと思う。

○議長団を鍛えるために5年生のときには、友達の参考になりそうで且つ希望する児童から順番に議長団に起用して学級会をしていたとの話があったが、順番で議長団をし、困る経験をする事でその児童が伸びるといふこともあるのではないか。

→確かにその側面はある。ただ、クラス替えをした5年生の4月の実態から、話合いの仕方を含め、自分達で学級会を運営していくには、全体の力を底上げする必要があると感じた。そのためには、話合いを回す方法や言い回し、合意形成の仕方、運営の仕方等をもっと学ぶ必要があった。短期間でそれらを自分のものにするためには、議長団が回ってくる番を待っていてから考えるのでは遅いと感じた。だから、まずは見て学ぶ機会を保障した。6年生になった今年度は、4月から委員会ごとの順番で回している。もうどの児童が議長団になっても一定のレベルで学級会を運営できるところまできていると思う。



II 助言者からの講評 ※要点のみ

林崎 俊一教授から

本校のPTA行事（玉入れ）と柱1の関係性

本校に勤めていた経験から言うと、玉入れはこの学校の球技みたいなものである。そして、今回の柱1の条件に一番合っているのは玉入れであった。しかし、子供たちが本当にやりたかったのは玉入れではなかったのではないか。玉入れは大会（PTA行事）があるから後からでもできる。ところがお化け屋敷や花火などのようなものは、今回しかできないものである。つまり、今回は柱1に合うものと子供たちが本当にやりたいことが合致していなかったと言える。もしかしたら、先生の介入ポイントはそこだったかもしれないが、難しいところである。

今日の授業に関わって

新しい学習指導要領になっても、基盤となるのは学級経営であることは明確に示されている。特活というものが非常に見直されている時代である。今日の学級会はずばらしかったと思う。ただ今日の学習だけでは深い学びになったかどうかは分からない。実践してからの振り返り、これを次にどう生かしていくのが大事である。これについては、本校から8月下旬くらいに発行される『原思』という研究のまとめを御覧になってほしい。それを見て今回の学級会が本活動の中でどのような意味があったのか分かると思う。ある実践を紹介する。ある女の子が、「どの意見もいいので全てやりましょう。」と言った。周囲の子たちは、誰かの意見を否定することに抵抗があり、賛成してしまった。教師は、「プログラムが可能かどうか意見を聞いてみては。」と助言した。その後の子供たちは、実施可能かそうかという視点で話し合いを進め、より深い議論をすることができた。本授業でもすべてやるという意見が出たが、実施可能かどうかという視点が入ると、なおよかったのではないか。

「自治」「自発」について

「自治」は、公共のために実践する集団決定・合意形成。「自発」は、自らのリスクと責任を負う自己決定・意思決定である。このことから、全体のことを考えて合意形成をしようというやり方は「自治」である。たとえみんなから反対される考えであっても、自分の責任において自分の考えをはっきりと話すことが「自発」と言えるのではないか。これらは両立させるのが理想だが、割と二項対立的に扱われることが多い。昔から日本では多数決の原理で物事が決められてきたことで、一人一人の意見を大事にしようとする教育の潮流が起こった。ただそうになると今度は、私事の見解ばかりになり、集団としてまとまりがなくなってきた。したがって、自分の発言に責任をもった子供たちが、集団として合意形成することが最も望まれていることである。個の確立無くして集団としての合意形成はない。今日の子供たちは、どのくらいのリスクを負っていたかは分からないが、少なくとも個の考えをしっかりともっていた。退屈そうにしていた児童は一人もいなかった。しっかりと合意形成をする中で自己実現をしていたと感じた。

今後の研究に期待すること

小中の接続を上手にやってもらいたい。中学校の先生方は、この子供たちがここまでしっかりと話し合いができることを知らない。参観してもらって機会を設けた方がよい。特別活動は、生徒指導とのつながりが非常に強い側面がある。学級経営がまさにそれである。そのあたりを研究の視点として取り入れてほしい。特別活動は何よりも楽しいものでなければならないと感じている。「楽しさ」を大事に今後も取り組んでいただきたい。

